

## 1. 教育の責任

現代社会学部において、人工知能（AI）およびデータ活用に関する科目を担当しています。主に文系学生を対象とし、AIの基礎概念や仕組み、社会的影響、さらに生成AIの活用方法とその課題までを体系的に扱っています。技術的な知識の伝達にとどまらず、AIが社会にどのような変化をもたらしているのかを理解してもらうことを重視しています。

また、学生がAIを受動的に消費する立場にとどまるのではなく、主体的に活用し、適切に判断できる力を育成することを教育上の責任と考えています。そのため、知識の習得だけでなく、課題発見力や論理的思考力、情報を批判的に読み解く姿勢の育成を目標としています。

## 2. 教育の理念

AI技術は急速に進展し、専門分野を問わず社会の基盤を支える存在となっています。そのため、文系学生であってもAIに関する基礎的理解を持ち、適切に活用できる力を備えることが重要であると考えています。私は、AIを「使えるようにすること」だけでなく、「正しく理解し、適切に距離を取れるようにすること」が大学教育の役割であると捉えています。

特に生成AIの普及により、学生は容易に高度な文章やアイデアを得られるようになりました。しかし、その出力を無批判に受け入れるのではなく、内容の妥当性や信頼性を検証する姿勢を育てることが必要です。倫理的視点や社会的責任を含めてAIを考察できる人材を育成することが、私の教育理念の中心にあります。

## 3. 教育の方法

授業では、抽象的な概念説明に終始することなく、体験的・実践的な学習を重視しています。AIの仕組みを理解してもらう際には、Web上で簡易的にAIモデルを構築できるツールを活用し、学生自身がデータを入力し、結果の変化を観察する活動を取り入れています。これにより、AIをブラックボックスとしてではなく、仕組みを持つ技術として理解させることを目指しています。

また、生成AIを授業内で積極的に活用しています。具体的には、学生にまず自力でレポートを書かせた後、生成AIを用いて改善案を作成させ、その違いや問題点を分析させています。このプロセスを通じて、生成AIの利便性と限界の両面を体験的に学ばせています。AIの出力をそのまま提出するのではなく、批判的に評価し、自らの思考と統合する姿勢を育てることを重視しています。

さらに、企業や社会におけるAI活用事例を紹介し、理論と実社会を結び付けています。著作権問題やバイアス問題などの具体的な事例を取り上げ、技術的側面だけでなく社会的・倫理的側面も議論しています。加えて、学生の基礎学力や理解度の差を踏まえ、数式中心の説明は最小限に抑え、概念理解を優先する構成としています。内容は「基礎理解」「応用例」「批判的検討」という段階構造で設計し、無理なく理解が深まるよう工夫しています。

## 4. 教育の成果

学生アンケートでは、「AIが身近に感じられるようになった」「生成AIの使い方だけでなく注意点も理解できた」といった意見が見られます。一方で、内容が難しいという指摘もあるため、教材や説明方法の改善を継続しています。

生成AIを活用したレポート演習では、初回提出時と最終提出時を比較すると、論理構成の明確化や考察の深化が見られ、一定の学習効果が確認できています。AIを無批判に利用する姿勢は減少し、出力を検証する態度が徐々に定着していると感じています。

## 5. 改善への努力と今後の目標

現在の課題は、学生間の理解度の差への対応と、AIに対する過度な依存を防ぐことです。そのため、補助教材の充実や段階的な演習設計のさらなる工夫を進めています。

今後は、生成AIを単なる効率化ツールではなく、思考を深めるための学習支援装置として位置付けた教育モデルを確立したいと考えています。AI技術の進展に柔軟に対応しながら、基礎理解と批判的思考を両立させる教育を継続していきます。

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：現代社会学部 名前：松尾 友暉 作成日：2026年2月27日

【添付資料】

